チャプター1　 what is comparative education?　　　　　　　　　　　　Jean Clarkson

比較教育学とは何か

(p4)

Learning outcomes

このチャプターの終わりまでに、読み手にのぞむこと：

・比較教育学とは何か、比較教育学は教育学者、専門家、政策立案者に対していかなる価値を有するのかを理解する

・教育システム、教育原理、教育実践の比較をいかにして行うかを理解し、私たちの文化的背景、価値観、姿勢によってこれらがどんな影響を受けるかを正しく理解する

・比較教育学の研究に関連する課題や注意をよく理解する

・イギリスやその他海外の教育システムに関するデータのソースを見つける

・比較教育学において質的研究を行うために、2つのアプローチの原理を適用する

(p4)

●チャプターの概要

　このチャプターでは、国内や国家間の調査という量的な方法、またデータの収集や、観察、人々との会話などの質的な方法、この両方を通してどのように正確な比較がなされるか、比較教育に興味を持つものに示すことで、比較教育の目的や焦点を概要する。それによって、現代のグローバル社会の中で常に変化している需要にかなうようなダイナミックな教育システムをほとんどの国が欲している理由を説明し、比較教育学の発展の歴史的な外観を示す。多くの量的な調査が提示されており、（この章では、）国の教育システムやそれに関した質的調査に、一般的に用いられる2つのモデルが提示されている。

他の教育システムに対する知識や理解同様に、教育学の学生は他の文化を研究し理解する基本的な技術や能力が必要となる。これによって学生は、どのようにしてまたなぜこれらが発展してきたのかを理解し、異なるシステムや習慣に対する寛容さや尊敬のまなざしをもつことが可能となる。比較教育は、異なる国や文化の教育実践や教育政策の分析や解釈に関する、教育理論の一つの要素である。他の国への好奇心や、幅広い社会や教育実践との関係への理解は、多様性や国際主義への理解、私たちの住むグローバル社会の重要性を下支えする（アレクサンダー、2001）。グローバリゼーションは、教育を職業とする者に、多くの国が経済的に、技術的に、政治的に環境的にも相互依存していることを理解するようますます要求し、それゆえ私たちがグローバルな市民として直面するだろう未来のために、次世代へいかに教えこむか、次世代をいかに教育するかについて、より深い理解が求められる。

　(p5)

私たちが他の国の教育システムを正しく理解したときにはじめて、私たち自身の教育システムの長所と短所の理解はより深められる。他国の社会環境、文化、習慣、政治的経済的変遷を知ることで私たちは、私たち自身のシステムを枠組みの中にあてはめることができる（意訳：自分たちのシステムが全体のどこに位置しているかが分かる）。他国の教育システムを理解することで、私たちは私たち自身の教育システムと比較することができる。もちろん、これは私たちが他の文化に対してオープンな姿勢でいなければならないということを意味する。つまり、情報に基づいた意義のある判断と選択をするためにも、私たちは自身の持つ偏見を認識し、それを取り除き、客観的で正確な比較の情報に焦点を当てなければならない。

●文化的アイデンティティ(p5)

　私たちはみな、文化的アイデンティティを持ち、帰属意識を抱かせるような見解を共有している。この帰属意識は、大学のスポーツ団体のような小さい集団かもしれないし、もしくは国家や宗教などの大きな集団かもしれない。それらの集団の中で、私たちは他のチームや国家や宗教への偏見を共有している。他の集団や文化との対立や交流は恐怖を生み出す。―なぜなら、それは私たちの普段の生活の仕方に対する根本的な問いに対して、異なる考え方を持つ異なる意見の存在を、暗に示しているからである。カルチャーショックは、それがたとえ他の文化で普通とされているものであったとしても、私たちが必ずしも正しいとみなさないような行動に直面した時にする、私たちの反応を述べるために使われる表現だ。違う文化に対する一般的な反応は恐怖であり、その恐怖が不信感や敵意を招く。

　教育システムの比較を始めるときには以下のような問題についての質的にも量的にも正確な情報の収集を行おう。

・カリキュラムの本質

・アカウンタビリティ（説明責任）と費用対効果

・管理上の実践、留年、退学

・達成と国家の基準

・危機に瀕する子供

・地方分権と教師の自律性

・機会の均等、包括と多文化主義

・教育の専門家の教育と訓練

そのようなソースから得られたデータは見解を支持し論破する客観的なエビデンスを提供し、結果として偏見のない結論を生み出すことを可能にする。

このデータから、あなたはさらに個々のケーススタディーを掘り下げることができる。これらの分析方法は、どんな教育システムもその国に関する歴史的、社会的、経済的、政治的な背景のうちにあるということを念頭に置かせることで、教育学者が、普段の行動様式と異なることをする場合の影響を考える手助けをする。比較教育学の学生として、あるシステムが他のシステムよりもよいと単に言うのは主に主観的であるため行わず、その両者の差異について議論することが好ましい。例えばイングランドから来たある学生は、全ての子どもが国（イングランド）の定めたカリキュラム通りに教えられているわけではなく、いつ読み書きを教えるのかというような問題に対して、他の国では多くの違いがあると教えられることに驚いた。現在のカリキュラムの作成に、人種や国の偏見などがいかなる影響を持って介入しているかを考えることと同様に、研究している国の教育システムの歴史的な発展を考えることは重要だ。

Refletive task(p6)

私たち自身の文化的アイデンティティを認識すること

以下の情報を読み、私たち自身の教育的経験の中で、最後の問いに答えなさい

ブロードフット（2003）は私たちに以下のことを思い出させる

「外国の教育システムを学ぶ際に、私たちは学校外のことの方が学校内のことより重要で、学校内のことを支配し、規定しているということを忘れてはならない。」（Broadfoot,2003,p275）

ブロードフットは学校のあるコミュニティ、あるいは国の文化について言及している。これは、教えられる科目や促される価値観などのように、学校の内側で起こっていることに深く影響する。一つの例は、体育の授業において教えられ、実践されるスポーツ

である。イギリスでは伝統的に、フットボールは男子、ネットボールは女子とされており、これは性別によってふさわしいものが、異なるスポーツや文化への期待を付与した文化的重要性に基づいている。

あなた自身の学校教育を振り返ってみよう

1あなたが住む、あるいは学校へ通っていた地域のコミュニティの文化をどのように説明するか。

2あなたが育った国の文化をどのように説明するか。

3それら文化はあなたの教育にどのような影響を与えてきたか。具体的な例を挙げてみよう。

●私たち自身の経験から解釈する

大部分の人は、私たちは育ってきた教育システムを当然のものとみなしている。主として政治家や宗教的リーダー（先導者）、親などの行為の結果として長年発展してきた、国家や地方の教育システムでさえも受け継いできた。何を教えるかという決定と、教えるために使われている教育学は、社会的に引き起こされた認識によって始まる。長年にわたりいかに文化が変化してきたかを理解するには、祖父母の価値観や見解と、あなたやあなたの仲間（意訳：わたしたちの世代）によって抱かれる価値観や見解を比較すればよい。もしこの比較が他の国にまでおよんだとしても、ある国のシステムを他の国にうまく押し付けることができるとは思えない。（解釈：親の世代と自分たちの世代ですでに価値観や見解が異なっているのに、他国に対して自分たちの価値観や見解を押し付けるのは無理だよね。）しかしながら、明らかな利点や不利点をもつ、何か国かにわたって行われた多くの客観的な調査は、批判的な反省と変化の始まりのためになる。

順応や実行が不可能な時でさえ、いかに他のシステムが機能しているかを理解することは価値を持つ。比較を通して、私たちが行っていることと学ぶことは、理由や経験に基づいているのではなく、伝統や偏見を敬うことに依拠していると知ることができ、より理解することができる。わたしたちは調査されたというより受け入れられてきた一連の決定や習慣の結果としての教育システムを受け継いできた。それらは厳密には教育的ではなく社会的とで政治的だ。（キング、1979、マクリーン1995）

比較教育の研究によって、実行できるもしくは理想的なものを再度解釈することによって現在のシステムに異議を唱えることができる。他の教育システムとの比較によって、（自国に対して）異なるレンズを通して観察でき、（それによって研究結果に新たな）解釈することができる。これは私たち独自の経験に基づいた解釈のモデルであり、私たち自身の国内的な研究を生み出す。

（p7）

ポッパー（1963）はこれを「主観的知識（subjective knowledge）」と呼んだ。これは私たちの意識的な経験の世界であり、この文脈の中で経験をより解釈できる。そういうわけで、この手法は有用だ。もし、私たちが開放的な精神をもっているならば、分別なく伝統的な方法にしがみつくのではなく、かわりとなるものを考えることで、教育を固定的なものにとどめておくことを避けることができる。

**Historical overview of international perspectives（p.7）**

国際的視点の歴史的概観

　比較教育学の学問は数百年もの間、存在していた。（比較教育学の）初期の基盤では、*旅人の物語*として表現された。なぜなら旅人たちは、（異なる地域では）どのように子どもが教育されていたかをランダムに観察し、提供していたからである（Trethewey, 1976）。古代ギリシャ・ローマはスパルタの教育学に感嘆していた。プラトンはいくつかのスパルタの習慣が、アテナの街が必要としていて取り込めるかを説明した。マルコ・ポーロが持ち込んだ、中国人が子どもを教育していた方法の逸話は、中世初期のイタリア人の興味を引いた（Crossley and Watson, 2003）。ジャン・ジャック・ルソーは、初期の他国の教育システムに対する興味をより詳しく明らかにすることで、1700年代にポーランドに教育改革を提案した。

　19世紀に公式の学校制度がイギリスで確立された時、教育者は他国に渡ってそこのシステムを検証し、自国に適用した際に益になるような慣習がないか探した。高位文化の解説者で学校の監査官であったマヒュー・アーノルドは、英国審議会の要請で1859年にヨーロッパに旅立った。彼の報告書は*フランスの（教室の）壁は我々のよりむき出しで、読み書きは我々より優れている、*や、*算数はより聡明に教えられている*等が含まれており無差別に比較されていた。彼のコメントは雑多で、彼が観察したものへは、エビデンスの権威なしに主観的な解釈をおこなっていた(McLean, 1995)。これは情報に基づいた結論を下すことを可能にするデータとエビデンスを重要視している現代では、おこなってはいけない。

　比較教育学がイギリスの政策に影響を与えているより現代に近い例は、1960、70年代におこなわれた総合中等学校の導入に見て取れる。1914−18年の第一次世界大戦では、全ての身分、階級の男がイギリス軍で隣り合って戦った。この結果、戦後には機会の平等、特に教育における機会の平等、が近代社会の発展には重要であると考えられた。この観点は第二次世界大戦後も続き、教育の力によってよりよく、経済的に成功した世界を作れるという楽観主義がはびこった。多くの国で大規模な教育の拡大をおこなう計画が作られた。多くのヨーロッパの指導者は海外の教育実践をみて、特に識字能力と計算能力を向上させる革新的な方法を探した。イギリスは代替モデルを探し、全てのレベルの才能を持った子どもたちが一緒に学ぶアメリカ合衆国のハイスクールをみた。当時、イングランドは３つの異なる「才能」レベルをもった子どもをグラマースクール、セカンダリー・モダン・スクール、テクニカル・スクールの３つに分けるシステムであった。子どもたちはこのシステムに１１才で隔離されていた。生徒の配置は名目上「才能」に基づいていたが、このシステムは主として階級分けを強化した。アメリカ合衆国のシステムを研究した結果、イギリスの３つに分かれた構造は２０世紀後半に総合制に変わった（Alexander, 2001）。スコットランドでは子どもを上級中等学校と下級中等学校に「才能」によって配置を定めるシステムがあった。1967年にはこれらの大部分は総合制の学校に替えられた。私立学校の大部分はこれらの変化から離れていた。

（pp.7~8）さらに最近では、イングランドの政策作成者は教育達成の国際調査の「優秀な成績」であった、日本や韓国等の成功している環太平洋諸国と、フィンランドやスウェーデン等のスカンジナビア諸国を調査した。この比較的分析の結果、イングランドの全ての子どものためにNational LiteracyやNumeracy Strategiesのような政策が考案された（Reynolds and Farrell, 1996）。この関心事の結果、国際バカロレアが英語教育上の重要な要素として進出したのかもしれない。スコットランドと北アイルランドではカリキュラムは同じようにはできておらず、教科はそれぞれ異なりそれぞれの国の需要に関係している。

**Why is research into comparative education increasingly important?（p.8）**

なぜ比較教育学の研究はより重要になっているのか？

　情報技術社会の到来は、教育の世界を含めた世界が縮小していることを意味している。比較教育学の一つの大きな論理的根拠は我々の能力向上と、我々の知識と経験の上限を既に知っている・知らないことだけに定めないことである。我々は知識と経験の上限をよりいっそう押し上げ、教育習慣を普段とは異なる手法にしようと試みている。これをおこなうには勇気が必要で、既に慣れ親しんだことから離れていくとしばし抵抗にあう。確かに我々は未知の領域と知識の範囲外の事柄を恐がるかもしれない。他国の教育学者から蓄積された見識を得なければ、カリキュラムへの変更、評価戦略、そして教育学的研究などの問題はより理解に苦しむかもしれない。自国と他国の同僚の経験を聞かなければ、教育はほとんど変化せず、向上せず、狭量になるかもしれない（Mazurek and Winzer, 2006）。教育の他の方法をくまなく観察することによって得られる見識によって、新たな知識は作られる。問題の異なる見解へのくまない調査と、手法は一つではないという理解によって見識は作られる。

　一つの教育システムをまるまる他へと移すのは決して選択肢にはなりえない。しかし、それ（教育システム）を研究していくとその一部分を取って我々のを改善し、我々の機関へ同化する方法が見えてくる。全ての教育は原動力であり、システムと組織が教育によって動く。システムを*異なるが*決して*良い*とは限らないもので取り替えるのは大変危険である。そこで何が学習を改善するのに移しかえられるかの判断をエビデンスに基づき下すのに、教育学者のスキルが必要になる。Crossley and Watson(2003)はこれを*知識人*の一部を成すと呼んでいる。教育学者は政治的、経済的、文化的な社会の議論において先導者の役割を担うことを期待される。これは広く教育の世界が他の国ではどのように機能しているかへの知識と理解を持つ知識人の立ち位置と、自身のシステムを改善するのに最善の案を取る立ち位置からなされる。

　比較教育学のさらなる狙いは、昔の教育システムがおこなっていて犯した重大な過ちをくり返さず、避ける近道を提供することである。実際の生徒に焦点をあてた例は子どもへの体罰である。これは１９世紀、いくつかのケースでは２０世紀前半におけるイギリスの教育の特徴であった。これは現在では許されないことであり、事実、欧州人権裁判所によって禁止されている。しかし、いくつかの国では未だに体罰を持続しており、イギリスの学校で勉強している留学生は体罰に対して他の行動統制方法を探さなくてはならないかもしれない。彼らが自国に戻った際、彼らは子どもの権利を尊重した異なる行動統制の形態を提供する立ち位置にいることになる。

　21世紀に我々は急速に変化する世界と不確実な現実に的確に対応できるグローバル市民を洗練した。我々の経験と観点を超えた問題を理解することは、我々の未来に適切な教養のある選択をすることを可能にする。Stavenhagen（2008, page 162）はグローバル化した世界で今日の教育の課題に注目する。曰く、*今日の連動している世界では、道徳的、社会的、政治的に平和的に共生することが必須になり、それは人類の存続に深く関係している。*最も広義の教育は、この共通の世界共通の課題に対して重要な役割を担う事が求められている。

　（p.9）世界的に尊重されている国連教育科学文化機関（UNESCO, 1995）は高等教育機関に生徒が批判的に思考でき、社会の問題を分析でき、それらに対して解決策を考え適用でき、そうする際に社会的責任を負える知識を持ち積極的な市民になるよう教育することを促している。大学とカレッジでの比較教育学課程では、標準的で受け入れられると理解されていた世界から、他の世界の観点を包含し考慮させることで、生徒の世界に対する視野を広げることができる。

**How do we ensure comparisons are rigorous?（p.9）**

我々はどのようにおこなわれた比較が正確だと保証するのか

　比較教育学と、大規模な教育達成の比較教育及び、その目的を達成する際に用いられた教育方法論の研究は、多くの場合、公的試験のリーグテーブルによって特に明らかにされた、成果の改善への懸念に動機付けられている：

激しさを増したグローバル経済と教育競争は比較と国際間教育の重要性を高めた。そして研究過程とそれによる発見の解釈において広い範囲の利害関係者を巻き込んだ。

Crossley and Watson, 2003, page 56

　教育の政策策定者・寄付者・消費者は、公的試験のリーグテーブルが暗示していること・市場力・費用対効果の高い教育への要求に対する方法を探してより海外へ目を向けている。二つ以上の教育システムを比較する事は曖昧にもなりえ、直感や偏見に左右されうる。以前紹介したMatthew Arnoldは1850年代のフランスにおける基本的算数の教育方法の水準をおおざっぱに書いていた。しかしその後突然、教室の壁に関するコメントを行っている。直感は我々が研究する事柄に影響を与えるかもしれないが、これは比較教育学の役割ではない。最初の段階はどの分野を比較するか決めることである。公正に・明確に・詳細にまで注意を向けた比較をおこなうには、研究方法が着手時から細かな部分まで計画されていなければならない。計画の段階で費やした時間は後に実を結ぶ。

p.9~

INTERNATIONAL AGANCIES AND DATABASE

 （国際的な組織とデータベース）

量的な研究手法は、客観的で事実に基づいた、測定可能なデータを創出できる。このような測定法は、国際的な調査を通して、マスメディアの中に頻出する。

アンケート調査等を用い、世界中のあらゆる学校から情報や統計を収集する組織も存在する。いくつかの最も大規模な調査センターやデータ収集プログラムには、以下にあげるものも含まれている。そしてこれらはすべて、ウェブサイトをもっている。

・アメリカにある教育統計のための教育国際センターである教育科学協会は、様々な国における統計を提供している。TIMSSは、影響力のある研究のひとつだ。これは、あらゆる国の生徒たちの数学や化学の到達点に関する信頼性のある、最新のデータを提供している。

・PIRLSは低学年の生徒の読解力の比較対象研究である。

PIRLSはアメリカの小学４年生を対象に、読解の到達点や態度や姿勢、比較対象国における小学４年生に相当する生徒のそれらを研究する。PIRLSは2001年に初めて35か国において施行され、2006年にはもう一度、45もの教育機関を対象に行われた。そして、次のPIRLSは2011を予定している。

Practical Task (p10)

国際調査を使ってみよう

グループのメンバーそれぞれが、PISAやOECDのような、前の章で挙げられた異なる調査か機関を選択しなさい。それぞれの人がそれらの調査や機関のホームページを見つけるためにインターネットで検索しなさい。そして、そのホームページについて、以下のことについてメモを取りなさい。

　　・その調査または機関の目的

　　・その対象領域：いくつの国がそれに関わっているだろうか

　　・データを公表する頻度：どれくらいの頻度でデータを出版しているだろうか

グループの中で、分かったことを比較しなさい。あなたたちが共有する情報が、特定のデータが必要である時に、参考にすべき調査や機関はどれか知ることをたすけるだろう。以下のことを一緒に検討しなさい。

　　・比較教育学の生徒であるあなたたちにとって、最も役立つ調査あるいは機関はどれだと思うか。それはなぜか。

　　・教育者と他の専門家、あるいは政策作成者という立場の違う人にとって、最も役立つものは異なっていると思うか。これはなぜだと考えられるか。

　　・前の章で挙げられていた中で、あなたが用いようと思わないものはあっただろうか。なぜか。

p.10~

・PISAは国際的な評価システムで、15歳の読解力や数学力、科学力にフォーカスしたものである。PISAは一般能力や、学習戦略のような全教科に通じる能力も含む。 これは先進国政府間で組織されたOECDにより体系化されたもので、2000年に開始され、３年ごとに行われている。

・イングランドのDCSFは、UKからの統計的情報のデータベースを公開している。このwebサイトには、DCSFとDIUDにより資金提供されたすべての研究プロジェクトの詳細が書かれている。DCSFとDUIDにとってかわられたDfESによって着手されたプロジェクトも載っているが、これは完全にUKのみに焦点を当てたもののようだ。

・カナダに本拠地を置く国際統計協会であるUNESCOは、多くの国やその教育システムの統計を提供している。この組織は、多くの国における初等教育での社会的不平等により生じる多大な影響などの問題や、すべての子どもたちに平等に教育機会を与えようとするチャレンジについて報告する。

・UCCERは世間にもよく認められたNottingham大学にある学校教育研究センターである。UCCERはその研究を、教育政策や国際発表という背景における慣習に主に焦点をあてていたので、多大な寄付を得ていた。

・OECDは1961年にパリで設立され、今やそのメンバーは30か国にものぼる。年に250もの英語とフランス語で書かれた論文を発表している。OECDはCERIも含む。OECDは、教育によりもたらされる個々人への利益も、国への利益も両方考慮している。個々人にとっての教育の潜在的利益は、一般的な生活の質の中にも、持続的で十分な経済活動の中にも存在する。国にとっての教育の潜在的利益は、経済成長や、社会の結びつきを支える共通の価値観（常識？）の発展の中に存在する。

教育システムは、常に自らを改革していかねばならない。常に新しくあるため、そして刷新的な取り組みや新技術をうまく利用するために。これらの組織やデータベースは、すべて２つやそれ以上の国家を分析する上で有用であり、これらの組織によって集められてた現存するデータは、さらなる研究へのコンテクストになりうり、個々の研究のきっかけとなる。

しかし、気を付けてほしい。統計はある程度まともな懐疑心を必要とする。なぜなら、それら調べたもののすべてを我々に提示することはないし、何通りにも解釈が可能だからだ。

p.11~

LOCAL RESERCH（地域研究）

多くの現地組織が、規模の小さなものも含めて、研究やデータ取集に携わっている。この研究はたいてい、エビデンスやデータに基づいた、詳細で厳密なものだ。情報は、インタビューや観察、フィールドノートや政策資料を通して集められる。

多くの質的研究は、比較研究で行われる。素晴らしい質的比較の教科書に、『Culture and pedagogy: International comparisons in primary education』というものがある。

教育的な国際比較を行うとき、あなた自身ですべてのデータを集める必要はない。現存するデータを分析し、それらの結果に対し自らの解釈を出すことはとても有効である。たいていあなたの解釈は質的比較に基づいている。インタビュー、観察、アンケートを用いて、他人からの批判を受けないような問題検証方を自力で考案することは困難だ。このことは、さらなる個人的な取り組みを必要とし、あなたが情報を得ようとしている個人もしくは国家とのより深い関係性をもつことも必要となる。

しかし、綿密かつ体系的に行ったとき、このことは、有効で妥当性のある情報をもたらす。常に重要なのは、厳密な分析を行うことなのだ。

体系的に、質的に国の教育システムを検査し、データを収集するのに有効ないくつかのモデルがある。

生徒にとって最も役立つ２つは、

DIDACTIVE TRIANGLEとTHE IDEOLOGICAL CROSSである。

両者とも、あなたが国の教育システムについて体系的な方法で批判的に考えやすくする。以下の説明は、あなたがこれらのモデルを使うことを助けるためのものだ。比較教育を行う手段としては、どちらのモデルも異なる国について考える上で役に立つ。

THE　IDEOLOGICAL CROSS

The Ideological crossは２つの交差したラインを用いる。国家における社会と教育システムの主な特性を説明するためである。このモデルを用いるとき、あなたは各々のボックスにある基準に、比較対象国を照らし合わせる。これらの基準を用い、その国の社会がどの程度開放的（または閉鎖的）か、その国の教育システムが子供中心なのか、教師中心なのか、その程度を検討する。そしてあなたはその国をそれぞれの軸に置くのだ。こうして軸上につけたマークの位置の関係性を検討できる様になり、社会が教育に与えるイデオロギー的影響をもあなたに検討させ得る。もしあなたがこの手法を異なる国でも繰り返し使ったなら、格子の上のマークの位置はきっと、異なる社会と彼らの教育システムの関連を分析する上でいいスタートを提供するだろう。

P.12~

THE　DIDACTIC　TRIANGLE

The Didactic Triangleはまず初めに「学ぶ」「教える」プロセスから始まる。それには、学習者と指導者の間で伝達される知識も含む。

したがって、内容やカリキュラム、学習者や教師がトライアングルの頂点３つを構成するのだ。このモデルは学習者と教育者側の観点から教育プロセスを観察する機会を与える。学習と指導は教育の心臓部分であり、それぞれの側面からの研究は、ある特定の教育システムがどのように機能しているかや、それが抱く哲学への洞察を可能にする。それは”カリキュラムの中身を規定する中央政府の役割は何？”というような、さらなる疑問の研究を手助けする。時々、トライアングルは円の内側におかれる。教育と学習は常にあるコンテキストの中に発生するということを暗示させるために。

あなたはこのトライアングルを異なる分析レベルでも用いることができる。なかには、単純に三つの点を識別するためだけに用いる者もいる。三つの構成要素の関係を探ろうと用いる者もいる。三つの構成要素がどのように合わさり、全体的に統合された教育システムを作り上げるのかを考えるために、用いるものもいる。

**Critical Thinking Task（p13）**

The Didactic Triangle

この課題では、あなたが最も多くのことを知っているだろう教育システム、つまりあなたが教育された教育システムに着目しなさい。一枚の大きな紙の上にその三角形を書きなさい。

最初に、三角形の頂点部分に、内容（ＣＯＮＴＥＮＴ）の主な領域を記入しなさい。

・あなたは学校で何の教科を勉強しましたか。あなたが選択することができたどんな選択肢も含めなさい。

・学校議会及び（または）規律委員会を通じて、対処されていたかもしれない学校での問題はなにかありましたか。宿題はどうですか。宿題が始まったとき、あなたは何歳でしたか。そして、宿題はどれくらい時間がかかりましたか。

・あなたの教育がイギリスでのものだった場合、学校の全ての子どもたちがナショナルカリキュラムを履修していましたか。難易度（習熟度別）によって、異なることを履修するグループに入れられていましたか。

・知識は、事実を学ぶことです。あなたが学校で得た知識の例をいくつか挙げなさい。

・スキルは、どのように物事を行うかを学ぶことです。あなたが学校で得たスキルの例をいくつか挙げなさい。

・態度は、忍耐力や積極性、熱意のような性質です。このような態度は、学校でどのように教わりましたか。学校に通うことについて、あなたが持っていた根本的な感情はどんなものでしたか。あなたの記憶を掘り下げて考え、どのように感じたかを描写しなさい。

次に左の頂点のそばに、主要な伝達者（ＴＲＡＮＳＭＩＴＴＥＲＳ）を記入しなさい

・あなたの先生の役割をよく考えなさい。彼らはいつも児童たちに知識を伝達していましたか。何回、児童たちは知識をクラスのみんなに伝えていましたか。

・先生たちはどのように何を教えるべきか識別していましたか。

・他のどんな専門家たちが学校で働いていましたか。ＴＡ（教育助手）や学習指導者はいましたか。彼らは何をしていましたか。

三番目に、三角形の右の頂点の傍に主な受信者（ＲＥＣＥＩＶＥＲＳ）を記入しなさい (p14)

・児童たちが主に教育の受け手である。しかし、地域社会の人々が学ぶために、学校へ来る機会はありましたか。

・両親たちは、例えば朗読を聞くことについての指導をなにか受けていましたか

・あなたが学んだことに関してもっと発言の機会が欲しかったですか？

あなたがこれをやり終わったら、三角形の三つの側面の間の関係性についてよく考えなさい。あなたの受けた教育制度はおおよそ、教科中心型、先生中心型、あるいは児童中心型であったと言えますか。

Ideological Crossで、同じ教育制度を検討してみてもいいでしょう。

**比較教育学における挑戦 (p14)**

 新しく、異なった教育制度を分析するとき、それらについて過度に熱狂的になることは簡単かもしれない。そのため、ただ単に、先入観の含まれた意見に基づくのではなく、正確で信用できる情報を集めることが特に大切である。このことは、解釈や比較に妥当性を持たせる場合は必須である。情報のソースは信用がおけ、信頼性があるべきだ。

**正確性と信頼性**：ある人が強い関心を持つとき、先入観の問題があるかもしれない。例えば、調査を行っているのがあなた自身の国である場合などがそうだ。自身が特定して認める必要のある国家主義的感情を、あなたは持っているかもしれない。ＤｆＩＤによって委託されたもののように、国際調査の中にはバイアスがかかっていたり、北半球で主流の研究方法を使っていたりするために批判されているものもある。政府がＴＩＭＭＳやＰＩＳＡのような全国調査のために情報を提示しているとき、できるだけ都合良くその国を見せるための決断が、教育統計の改ざん、あるいは特に好ましい分析に基づいた情報を提示することを引き起こしているかもしれないということも、主張され続けている。そのため、情報のソースを批判的に分析することが、常に不可欠なのである。

**比較可能性**：リンゴと洋ナシを比較することはできない。あなたが異なる言語の中で作業しているとき、比較可能性を確立している言葉の解釈は重要である。一連の重要な質問が、比較可能性が不足することを防ぐだろう。同一の言葉が同じ意味を伝えているだろうか？あなたの生まれ育った環境で、ある特定の言葉につけられている意味が他のところでも同じであると推測する傾向がある。しかしながら、このことは、しばしば本当のことではない。例えば、アメリカでの「public school」は州立学校であるが、イギリスでは私立学校を意味する。これが示すように、全ての国は、教育学用語に対して、異なる様々な意味を持っているのである（Corner and Grant, 2004）。同じ集団が比較されているだろうか？全員の能力が調査で使われたテストで示されているのか、あるいは、成績の悪い人の能力は、国の達成率を上げるためにテストから取り除かれているのか。目的における違いは、学校の種類を比較する際だけでなく、教育の異なる基盤を持つ社会同士で、かなり異なる前提を調査する困難も示している。文化的なコンテキストの中で学校を調査することが、学校が異なる国の中で果たすことを予期されている異なる目的を考慮し損ねるはやまった比較検討を避けることにつながるであろう。

国々の制度及び比較のための事例の選択を注意深く検討することが、重要である。もし、比較の目的が政策の作成であるならば、「参考になる」国々、あるいは私たち自身の国と発展の様式が関連している国々を選ぶことがより効果的であるかもしれない。例えば、このコンテキストではイギリスの教育と発展途上国の教育を比較することは道理にかなっていないだろう。

**一般性と特異性のわな (p15)**：研究領域に関係する資料が選択される基準は個別のものであるだろうが、その基準は一般的なトレンドの存在やより大きな枠組みの中での動きとつり合いがとられるべきである。これが行われなかったとき、人々は「*全て*のイギリスの初等教育」あるいは「アメリカの州教育」のような一般化されすぎたフレーズを使う。注意深く、いつもコンテキストを心にとめておくことが重要である。

**比較教育学の将来 (p15)**

比較教育学の初期の発達や洞察は、世界の異なる場所で起こっていることへの私たちの好奇心を明らかにし、それは私たちに深く根ざしている。異なる国から来た人間たちは全ての社会的状況における違いについて話し、若者たちは変化に毅然と立ち向かうというよりは、むしろ、彼らの前提を変え、違いをよく検討しようとしているように思える。文化借用は、政策決定者が異なる実践を受け入れ、学校改善、達成、教えることや学ぶことなどの良い実践モデルをあるシステムからほかのシステムへ移植しようとすることを助ける。（Alexander, 2001）

　理論を勉強することや国際的なトレンドを読み解くこともとても有益なことであるだろうが、実際にじかに教育の違いを経験することには比べものにならない。ギャップ・イヤー（※高校卒業後、大学入学資格を保持したまま1年間遊学することができる制度）や交換留学プログラム、留学の取り組みは、生徒たちが他の教育制度や教育の変容を経験するための非常に多くの機会を与えている。例えば、交換留学生たちは、じかに他の教育文化を経験し、彼ら自身の教育制度が世界中で普及してはいないということにしばしば驚く。そして、それから、彼らは代替の制度を検討することができるようになるのである。だが、そのような機会は２１世紀の経済状況の中で徐々に減少しているように思える。しかしながら、疑いようもなく、教育における比較検討の将来は、情報へのアクセスを大幅に拡大しているインターネットの発達や拡散によって影響を受けるだろう。グローバリゼーションの力は、政策決定者や実行者、理論家の間で教育における国際的なトレンドへの興味を増長させているのだ。というわけで、比較教育学の領域には確固とした将来が待っているのである。

**章のまとめ (p15)**

　比較教育学は、私たちの偏見を取り除いたり、極めて注意深く、厳密な方法で他の教育制度を検討したりすることと関連している。これは、見聞の広いコンテキストの中で行われなければならない。

・各々の国が独特な伝統や慣習によって作り出された文化的遺産を持っているので、単なる直感や当て推量は比較検討の信頼できる手段ではない。

・どんな国の専門的、政治的かつ道徳的な決定も、グローバル社会との相互作用と関係している

・ある教育制度をある国からとってきて、他の国における制度に重ね合わせることはできない。なぜならその制度は、元の国において主流の政治的、経済的及び文化的コンテキストの中で発展したものであるからだ。

・ある制度全体がどんなに効果的に見えるとしても、その制度の特徴だけを、導入し、とりいれることができるのである。

・教育は疑うべくもなく全ての国において変化を目指す行為主体であり、「完璧な社会」をつくる教育の特徴とは何かについて進行中の議論が行われているべきである。

経済的、政治的そして技術的にも、世界はますます相互依存するようになっている。加えて、私たちの若者を教育するお互いの国の制度の深い理解が、見聞の広いグローバル市民を作り出す。紛争や敵対心からくる脅威のもとにある世界では、比較教育学研究が将来に希望を与えるのである。

**研究の焦点 (p16)**

**課題１**

この章は、比較教育学や研究において影響力の大きい本に言及する。

・Crosssley, M and Watson, K(2003) Comparative and international research in education.

 London: Routledge.

この本を読むことは、あなたが比較教育学の知識や理解を深めることを助けるでしょう。二章（「Multidisciplinarity and diversity in comparative education」）では、比較教育学とは何かより詳しい説明がされている。それはこの章を延長した内容を提供しているので、特にあなたにお勧めのものになっている。CrossleyとWatsonは、異なる国の教育課程を比較することから、私たちが何を学ぶことができると言っているのだろうか。

・また、CrossleyとWatsonは、教育のやり方がどのように世界中に広がったのかという、いくつかの面白い歴史的な例を挙げている。あなたに興味を持たせた例についてノートを取りなさい。

**課題２**

G. Whitty(2002) Making sense of educational policyという本の中の、PowerとWhittyによって書かれた「Devolution and choice in three countries」の章を読みなさい。PowerとWhittyはイングランド及びウェールズ、アメリカ、ニュージーランドにおける義務教育の比較研究を行っている。彼らは特に、学校の自治権や両親の選択権が大きくなっている、これらの三つの地域の教育学制度の最近の発展を調査している。その章を読んで、その内容ではなく、比較のプロセスに関してのノートを取りなさい。

・どのように筆者たちはそれらの国々を比較しているのだろうか

・もしあるとしたら、各々の国について彼らはどんな背景の情報を提供しているだろうか

・彼らはどのように文化的あるいはコンテキスト的違いに対処しているだろうか

・彼らは、同様の条件のもとにあること同士を、実際に比較しているか

・彼らは判断を下しているか。その場合、彼らは何を基にしているのだろうか。

・あなたの意見では、それらは平等な判断であるか。

・あなたは比較教育学を扱うことについて、その章から何を学んだのか。